

B O O K



あしあと
『ひかりの足跡』
—ハンセン病・精神障害とわが師 わが友—

著者

元 厚生省医務局長
元 国際福祉医療大学総長
(らい予防法廃止運動の中核者) 大谷藤郎

元厚生省医務局長の要職にあった大谷藤郎先生が貴重な書物を世に出した。題して「“ひかりの足跡”ハンセン病・精神障害とわが師・わが友」と名づけ、内容は514頁にも及ぶ分厚いもの。その約半数はハンセン病(旧名らい病)患者さんの人権回復のために行動した「らい予防法」廃止運動の成功と恩師小笠原登先生が学会で罵倒され、追放された汚名回復運動の生きた記録で埋めつくされている。後の半数は先生が長く訴え続けてきた精神障害者対策等であり「ハンセン病と並んでこの対策は私の生涯の仕事となった」と結んでいる。

1972年頃先生は厚生省の中で微妙な立場にあった。いや、自らその道を選んだのである。というのは当時ハンセン病療養所を直接指導監督する国立療養所課長の要職にあったのである。この職制は「らい予防法」が如何に悪法かつ、人権無視の法律であってもその法律は忠実に順守しなければならない役職であった。しかし先生は「らい予防法は悪法だから廃止すべきである」として廃止運動を推進しており、むしろ運動を強化させたのである。法に従って患者対策を進めるべき責任者が逆にその法律に反対して行動を開始、強化したらどうなるか。国家公務員たる者その結果は火を見るより明らかである。先生はそのことを百も承知で声高らかに廃止を訴え続けていた。

しかし先生は内心の苦しみと、人には言えない心の葛藤もあったのであろう。その思いをこの書物の中でつぎのように表現している。「小笠原登先生の説は正しい。ゆえに行政の場で先生の志を自分の手で実践に移そう。ただそれが間違っていれば多くの人を傷つける大変危険な道である」と苦しい心境の一部をのぞかせている。

では、ここに登場する小笠原登先生とはどういうお方だろうか。この書物を中心に、若干私見も加えて説明すると、大谷先生は学生時代京大医学部皮膚科特別研究室で小笠原先生と出会い、お手伝いしたことを嚆矢とする。

学内ではここを“特研”と呼びハンセン病患者さんの診療を行っていた場所である。当時ハンセン病といえば世人は「汚く恐ろしい病気で日本民族の血も汚す悪病」と忌み嫌っており、その患者さんを診療する特研は学内で異端視されていた。研究室とは名ばかりで屋根は古びたトタン張り、崩壊しかかった納屋に等しく、ここで小笠原先生は1人ハンセン病患者さんの診療従事しており同患者さんの人権回復を訴えていたという。大谷先生はこの行動に痛く共鳴師事し、小笠原先生の遺志を継ぐ導火線になったとされる。

らい予防法には官憲もからみ、牢獄のような施設に強制収容、外出を許さず、お金はその療養所のみの限定特製で世間と差別、男性は去勢までされていたらしい。これがらい予防法であった。大谷先生の血涙を絞った運動は世論も支持し、らい予防法廃止法案は超党派、満場一致で平成8年成立施行され、今日に及んでいる。

このように官僚が自ら順守すべき法の矛盾について反対、成功した例や書物は他になく医療、公衆衛生分野に身を置く関係者は将来のためにもぜひご一読をおすすめしたい貴重な総括誌である。

西武学園医学技術専門学校(文理佐藤学園)顧問 佐藤乙一

発行：株式会社メヂカルフレンド社 〒102-0073 東京都千代田区九段北3丁目2番4号
電話 03-3264-6611 定価：本体4,500円+税